

詩で対話する／詩と対話する[†]

青柳 宏*・岸島 崇**

宇都宮大学大学院教育学研究科*

鹿沼市立東小学校**

私達は、大人も子どもも、詩を書くことで、感情の奥底（魂）を表現することが出来る。しかし、そのためには、まず詩を身近に感じる必要がある。学校教育の中で、子ども達が詩を身近に感じるためにはどうしたらよいだろうか。私たち（青柳、岸島）は、そのことを誠実に考えながら実践をすすめている内に、自然に、「詩で対話する／詩と対話する」という方法に導かれることになった。

キーワード：感情の奥底（魂）、詩で対話する、詩と対話する、人格

1. はじめに

長い長い小説『失われた時を求めて』を書いたフランスの小説家マルセル・ブルーストは、その小説の中で次のような言葉を記していた。

「人間の話し言葉は魂と関係があるが、書き言葉の文体のように魂を表現することはしない。」（ブルースト、訳、2013: p.299.）

私（青柳）は、時折、むしろ他者の「話し言葉」の中にこそ「魂」を感じることがあるので、にわかに、このブルーストの考えには賛同できないところがある。しかしまた、ブルーストの言わんとすること、いわば、「書き言葉」こそ「魂」を表現できる、ということも私なりに分かる気がする。

日常生活の中で、話し言葉で会話している時、私達には、魂が感じていることを話し言葉の中に込める暇（時間）がない。話をしている相手に即応するには、自分が本当に感じていることを内面で言葉化している暇がない。しかしもし、本当に感じていることを、ゆっくりと内面で言葉化し、ゆっくりと書き言葉にしていったら、私達は私達の「魂」を表現できるかもしれない。私は、ブルーストの言葉をこのように解釈するのがどうだろうか。

ところで私は、私達（大人も子どもも）が「魂」

を表現できる「書き言葉」のジャンルの一つが「詩」であると思う。日本の詩人・茨木のり子は、「詩は感情の領分に属していて、感情の奥底から発したものでなければ他の人に達することはできません」（茨木、1979: p.78）と語っていた。茨木のいう「感情の奥底」と、ブルーストの「魂」がほぼ同じものを指しているとしたら、私達は、「詩」によって（も）、魂（感情の奥底）を表現できる、ということだろう。

ところで、学校教育は、いわば「書き言葉」を軸にした教育であると言える。主たる教材である「教科書」は「書き言葉」による。そして「書き言葉」としての教科書を軸に教育が実践されている。しかし、学校において、「書き言葉」を軸にした実践（授業）が積み上げられていくことで、私達（大人も子どもも）は、果たして「感情の奥底（魂）」を表現することが出来るようになっていだろうか。それにはおおいに疑問がある。

しかし、ブルーストや茨木の言うことを信じるならば、「書き言葉」にはおおきな可能性がある。例えば、「書き言葉」としての「詩」には、感情の奥底を表現できる可能性がある。だから、学校教育の中で、教師も子どもも、感情の奥底を表現するものとして「詩」を捉え、自ら本気で「詩」を読み書いてみようと思えば、それは本当に素敵なことだと思う。そして、「詩」を読み書く実践（授業）を通して、私達は、互いに互いを理解し合うという人間の大切な営みそのものを深化させていくことが出来るのではないだろうか。

今回、私たち（青柳、岸島）は、このような「詩」

[†] Hiroshi AOYAGI* and Takashi KISHIJIMA**:
Talking through the poetry / Talking with the
poetry.

* Graduate School of Education, Utsunomiya
University

** Higashi Elementary School of Kanuma
(連絡先: aoyagi@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

への思いを共有して、実践（授業）をこころみた。
以下、その記録である。

2. 詩で対話する

今回（2016年7月）、私たち（青柳、岸島）は、小学校三年生のクラスで、「詩で対話する／詩と対話する」実践をこころみた。あるいはひとつの自然な流れとして「詩で対話する／詩と対話する」という実践に導かれたと言った方がよいかもしれない。

大学教員である青柳宏は、以前から、「詩」を読んだり書いたりする実践を、小、中、高校、また大学（大学院を含む）でも実践してきた¹。そして今回（2016年6月中旬）、小学校教員であり、三年生を担当する岸島崇から、岸島自身が担任をしている三年生（40名）のクラスで授業をしてほしいという依頼を受けた。その依頼を受けて、やはり今回も、「詩」に関わる授業をさせてもらおうと青柳は考えた。そして、青柳の授業は約一ヶ月後の7月13日（水）におこなうことになった。

2. 1. 小学校三年生の心の世界を想像して「詩」を書く

小学校三年生を相手にして、どのような「詩」の授業をしたらよいか、青柳は迷ったが、いずれにしても、三年生の子どもたちを「詩」の「世界」に誘いたいと思った。

しかし、具体的にどんな詩を教材にして、詩の世界に誘ったらよいか、そこがまず考えどころである。小学校の国語の教科書に載せられている詩をいくつか読んでみた。しかし、どうもしっくりこない。そこでまた、教科書ではなく、詩人の詩集や、子どもが書いた詩を集めた本も読んでみた。しかし、まだしっくりこない。素敵なお詩はたくさんあるが、授業をさせてもらう以上、青柳自ら小学校三年生の心の世界を想像し、その心にうったえるような詩がほしかった。そこで、青柳は自ら詩を自作することにしたのである。日常生活の中ではなかなか言葉に出来なくても、詩の形でならば、それを言葉にすることが出来るということ。このことをまず、小学校三年生の子ども達に伝えたいと思った。そこで自作したのが以下の詩である。

すき！！

青柳 宏

ぼくは、きみのことがすきだ。

でも、きみはぼくのことをすきだろうか？

ぼくは、きみのことが、本当にすきだ。

でも、きみはぼくのことを、本当にすきだろうか？

でも、ぼくも、なんだか、じしんがなくなってきた。

ぼくは、きみのことを、本当にすきなんだろうか、と。

本当にすきって、どういうことだろうか？

もし、きみがいじめられていたら、きみのことをたすける、ということだろうか。

でも、もし、ぼくが、こわくなってしまって、きみのことをたすけられなかったら、

ぼくは、本当には、きみのことがすきではない、ということだろうか？

でも、もしぼくが、きみをたすけられなかったのなら、ぼくは後できみに心からあやまりたい。

本当に、ごめんねと。

そうしたら、きみは、ぼくをゆるしてくれるだろうか？

もし、きみがゆるしてくれなかったら、ゆるしてくれるまで、ぼくはあやまりつづけたい。

ごめんね、ごめんね、ごめんね……、と。

でも、どうしても、きみがぼくをゆるしてくれなかったとしたら、ぼくはきみのことをすきでいられるだろうか？

でもぼくは、それでも、きみのことをすきでいられると思う。

なぜなら、そうかんたんにはゆるしてくれないきみのことが、ぼくはやっぱり、本当にすきだから。

16.6.23.

青柳は、上の詩（「すき！！」）を、7月1日（金）に岸島に送った。そして、翌週のはじめ（7月4日から5日）くらいに、子どもたち全員に配り、読み聞かせをしてもらい、さらには一日一回音読するよう「宿題」にしてもらうこともお願いした。その際、子どもたちが、読点を意識して音読するよう、三日に一度くらい岸島が「読み聞かせ」を再演してくれるようお願いもした。そして、子どもたちが、詩「すき！！」に本当に興味を持つかどうか、「是非、ありのままを教えていただきたい」と岸島をお願いをした。さらに、「とにかく、無理をせず、どうか気楽に、出来る範囲で、まずは岸島さんと子ども達が

ほくの詩を楽しんで」ほしいこと、かつ「もし、何らかの手応えを感じたら、是非、岸島さんが、まず授業してみてください」ともお願いをした。

以上のように岸島にお願いをした上で、もし子どもたちが、この「すき!!」にあまり興味をもてなければ、また別の詩をつくってみようとも考えた。しかし、この時点(7月1日)では、青柳も、7月13日の自らの授業は、やはりこの「すき!!」を教材として授業を行うことをとりあえず考えていたのである。

2. 2. 詩(「すき!!」)に対する子どもの応答

7月4日(月)、岸島は、青柳が送った詩「すき!!」で授業をおこなってみた(青柳はその場にはいない)。まず、岸島が読み聞かせをおこない、子どもたちに自由に感想を述べてもらう、というシンプルな授業を実践した。以下、子どもの発言である。尚、()内の言葉は、子どもの発言を聴いた上での(青柳に向けて書いた)岸島による補足あるいは推測である。

・Oさん：はっきり「すき」と言いたいのだと思うけど、言えないところがいい。(「でも」「だろうか」などの言葉が「はっきり言えない」と思ったのだと思うのですが…)

・Oくん：「ほくは、きみのことがすきだ。」と言えるところがすごい。(「僕は言えない」とOくんは言っていました。)

・Nくん：最後の「なぜなら…」で、ゆるしてくれないきみのことがすきということが分からない。(このNくんの意見に共感する子達は10人ぐらいいたように思います。ゆるしてくれないのにすきってどういうこと?と。)

・Kさん：最後から3行目「でもほくは、それでも、…」がとてもいい。(理由は忘れてしまいましたが、彼女ははこの文がいいと言っていました。)

・Kくん：「ごめんね、ごめんね…」本当に謝っているようで気持ちが伝わってくる。(彼には何か思い当たる節があるのかなと思いました。)

・Aくん：青柳先生は、何度も問いかけをしている。そこがいいと思う。(彼には「でも」が多用されていること、たくさん自分自身に問いかけをしていることが気になったようです。)

・Tさん：「でも、ほくも、じしんがなくなってきた」

の気持ちがよくわかる。自分にもこのようなときがある。(おそらく彼女には好きな男子がいるようで、このようなことを思ったのだと考えます。この子以外にも同じような気持ちになった子が結構いました。)

・OGくん：ほくは一度好きな人をあきらめようと思ったけど、またいっしょになってすきになった。(突然の告白に驚いたのは僕だけで、他の子達は「そうなんだ」と聞いていました。前のTさんの意見からのつながりかなと思いました。)

そしてこの後、話が、「ほく」がごめんねと謝ったことを許せるか許せないかの話し合いになり、「けんかはよくないから許してあげる」や「ちょっといやだけど許してあげる」などの意見がでたという。それからまた、「きみが許してくれなくてもほくはすきでいられるかどうか」の話し合いにもなり、「とにかく謝り続ける」「間をおいてとにかく謝る」などがでた。そして、授業の最後に子ども達に感想を書かせた。その内のいくつかを下に掲げる。

・KTさん：自分がすきでも、あっちがきらいだったら、自分はすぐにあきらめるかあきらめないかを書いている詩をみんなにつたえたいんだってことを話さないで文でつたえようとしていることがよくわかった。

・Yさん：きみのことがすきだけど、まよって、まよって、まよってさいごには自分のきもちをつたえることができるととてもすばらしかったです。

・OTくん：ちゃんとすきだということをいけるといいところがいいと思った。

・Sさん：わたしも青柳さんみたく自信がなくなるときがあります。

・Aくん：ほくはすきといえないけど青柳宏さんは言えるのかふしぎです。

・Sくん：ゆるすゆるさないの前に、だれがいじめるんだろう。

・KNさん：この文章をうちの人によませたらいいと思います。そしたらよんでる自分もうちの人もかなしいというかふあんていな気持ちになるのかなと思います。

・Tくん：全部の行に愛情が一つ一つこめられていた。

・KWくん：ほくの気持ちがいっぱいあって心配しすぎだなと思いました。

・Mさん：わたしと同じところがあって詩を書いてみたいと思いました。

以上が、青柳の自作詩「すき！！」を教材として岸島がおこなった授業のあらましである。そして岸島は、「授業後も何人かが話に来てくれました。正直、全員が食いついたわけではありませんが、「こだわり」が強いクラスではあるので、話がいはあるなと思いました。それから子ども達は自分たちで詩を書きたいのかなとも思いました。」と青柳に伝えた。

2. 3. 「すき！！」の続編を書く

以上みた詩「すき！！」に対する子どもたちの応答を岸島から（メールで）伝えられて、詩を書いた青柳がまず驚いたことは、少なくない子どもたちが、どうやら、「すき！！」という詩は、異性に対する気持ちを書いていると受け取ったということである。青柳自身は、「すき！！」を書いている時、いわば男の子同士の関わりをイメージしていたので、これが驚いたことの一つである。

そして、子どもから出された疑問の中でも、Nくんの「最後の「なぜなら…」で、ゆるしてくれないきみのことがすきということが分からない。」が、詩の作者（青柳）としては一番気になった。岸島によれば、「このNくんの意見に共感する子達は10人ぐらいいたように思います。ゆるしてくれないのにすきってどういうこと？」ということである。

要は、詩の最終行「なぜなら、そうかんたんにはゆるしてくれないきみのことが、ほくはやっぱり、本当にすきだから。」の意味が感じられなかった（分からなかった）子どもが10人位いたということである。正直に言えば、青柳としては、「ここが感じてもらえなかったのか」と少し落ち込んだ。青柳としては、この最終行を、三年生の子どもたちに感じ取ってほしいと期待していたからである。しかし、だからといって、感じ取れないことを感じ取らせるような授業をしたいとは思わなかった。そこで、それならむしろ、子どもたちと「対話」をすればよい、と青柳は考えた。そうだ、「詩で対話すればいいじゃないか」と。そこで、青柳は「すき！！」の「つづき」の詩を書いた。そして、今度は、子どもたちの想像に乗っ取って、「男の子と女の子の関わり」を意識した。同時に、「正直、全員が食いついたわけではありません」という岸島の指摘をふまえ、より

簡潔に書いた。それが、次の詩である。

もし、きみがゆるしてくれなくても……（「すき！！」のつづき）

青柳 宏

きみは、まだ、おこっている。

きみの目を見た。

「あなたのことは、まだ、ゆるせない」というしんけんな目だ。

でも、こんなにきれいな目を、ほくは今まで見たことがないと思った。

だから、なぜか、おこっているきみは、じつは本当はやさしい人なのかなあ、と思った。

きっときみは、これからも、ほくだけでなく、

もし、ゆるせないことがあったら、いろいろな人をおこるだろう。

「ゆるさないわよー」と。

そのたびに、いろいろな人が、きみの目を見ておどろくだろう。

なんて、きれいな目なんだろう、と。

なんて、しんけんな目なんだろう、と。

だから、もしきみが、ほくをゆるしてくれなくても、ほくは、きみのことがずっとすきだ。

きみの、きれいで、しんけんな目がずっとすきだ。

そして、ほくもいつか、きみのようになりたい。

’16.7.5.

上の詩を7月5日（火）に岸島に送り、この「続編」を出来ればまた授業にかけてもらえたらとお願いした。そして今度は、その授業の最後に、「青柳のまねをして、自分の気持ちを詩に書きたい人は（自学ノート等に）書いてみよう」と呼びかけてほしいともお願いした。

そして、岸島は、青柳の願いを受けて、7月6日（水）に、続編「きみがゆるしてくれなくても……」の授業をおこなった。今回の授業時間は20分程度しかとれなかったが、次のような感想が子どもたちから出された（今回も、青柳はその場にはいない）。

・TRさん：わたしはこの詩の全部がすきな人と思う気持ちだと気付きました。心の中ではこの詩を小さなこい（恋）だなあ、と感じました。

・KSさん：ちゃんと気持ちがあっかんぺきでした。文を書いてきてくれて、またさらにわかりました。1枚目は、ちょっとなっとくですけど、2枚目は、

すごくわかりやすかったです。

・KMさん：題名に自分の思いが入ってますね。

・MKさん：わたしは「ぼくは、きみのことがずっとすきだ」のところがいいと思いました。

(因みに、以上が、詩を「共感的に」読んだ子どもたちの感想である。それに対して、以下の感想は、詩に対して疑問を提示しているものと言えよう。)

・KTくん：きれいな目を見たことがないので、どんな目なのか見てみたいです。

・HSさん：きみの、きれいで、しんけんな目がずっとすきだの、しんけんな目ってどういう目ですか。さらにどこがずっとすきなんですか？

・KWさん：なんだか、おこっている人をなんでここまでおこられてもすきになれたのがよくわかりません。

・HRさん：まだ、きみはおこっているのに、ぼくはまだすきなことにおどろきました。

・SAさん：まだおこっているんですね。そしてぼくもいつかきみのようになりたいという所がわからないんですけど、次はないんですか？

(そしてまた、以下のように、新たな疑問をもったり、まだわからないと感じる子もいた。)

・SIくん：そのすきな人の目以外に、すきなどころはないのかな。

・KWくん：いっぱい思ったことや考えたことがあって、いつになったらしゃべるのだらうと思いました。ぼくの心がとてもいいとおもいました。

以上が続編「もし、きみがゆるしてくれなくても……」に対する子どもたちの感想である。そして、この翌日(7月7日)、岸島は、今度は子ども達自身に詩を書かせる授業をおこなった。そこで書かれた子ども達の詩について、岸島は次のように青柳に伝えている。

「驚いたのが、本日(7/7)に書いてもらった詩がとてもよかったことです。青柳先生の「語り口」を真似して書く子がいたり、そんなことは関係なしに自分のことをズバツと書いたりして、「この子達、表現が豊かだな」と思いました。ちょっと驚きです。それから、ほとんどの子が書くことに対して苦にできなかったことです。それよりも1枚だけでなく、2枚、3枚と書く子達がいたぐらいです。もちろん、表現は千差万別ですが、なんというんでしょうか……どれも紹介したくなります。というか子ども達が紹介し

たいようです。」

このように、子ども達は、自ら詩を書きはじめ、またそれを紹介したいと思い始めたのである。しかし、青柳としては、やはり子ども達から再度出された疑問が気になる。例えば「きみの、きれいで、しんけんな目がずっとすきだの、しんけんな目ってどういう目ですか。さらにどこがずっとすきなんですか？」等の疑問である。そこで、再び青柳は、子ども達と詩で対話しようと考え、「もし、きみがゆるしてくれなくても……」の続編を書くことにしたのである。

2. 4. 「もし、きみがゆるしてくれなくても……」の続編を書く

青柳が、「もし、きみがゆるしてくれなくても……」の続編として書いたのは次の詩である。

きみの目 (「もし、きみがゆるしてくれなくても……」のつづき)

青柳 宏

きみの、きれいな目。

赤ちゃんの時、きみの目はきつと、うっとりするくらい
やさしい目。

ほいくえんに入った時、きみは、きみのともだちがお母さんがこいしくてなくのを見て、きつと自分もかなしくなったと思う。

その時のきみの目は、やさしいけれども
かなしい目。

小学校に入学した時、大きな学校におどろいた。ほいくえんよりももっと、男の子も、女の子もたくさんいるのに、おどろいた。

その時のきみの目は、びっくりして、きらきらしていた。

でも、ちょっとその目は、ときどき、ふあんそうにもなった。

小学校三年生になった。

新しい友だちができた。そして、すきな子も、できた。

そのときのきみの目は、ちょっとはずかしそうな目

になった。

でもある時、きみのすきな子が、きみのことをたすけてくれなかった。

だから、きみはその子におこった。

すきだからこそ、しんけんにおこった。

だから、今のきみの目の中には、

やさしさと、かなしみと、おどろきと、ふあんと、はずかしさと、いかりと、しんけんさと、そして「好き！！」という気持ちげんぷ入っている。

ぼくは、きみのことがすきだ。そして今日きづいた。きみも、ぼくのことがすきなのを。

だから、そんなにきみは、ぼくのことをしんけんにおこったんだね。

’16.7.8.

青柳は上の詩「きみの目」を7月8日（金）に岸島に送り、岸島は7月11日（月）にこの詩を子ども達に読み聞かせた。「きみの目」を読み聞かせた後、出てきた感想は次のようなものである（この時も青柳はその場にはいない）。

・YTさん：「だから、そんなに…」が最後の文にきていていい詩なのでいいと思います。

・OKくん：なんでそんなきれいな目をするのだろう。題名の「すき！！」がよく僕の心に届いた。

・TRさん：「きみ」はやさしさがあるから、人がかなしんでいると自分もかなしくなるのがわたしは心にじわっとかんじました。人も自分も同じ目になることがわかりました。

・SAさん：すごく詩が長かった。最初の題名の「すき！！」というところが入っていた。男の子の好きなこの目の中には、やさしさやふあん、はずかしさなど色々な思いが入っていることがよくわかった。

・OGくん：好きという気持ちがよく伝わってきました。

・OYさん：赤ちゃんの時、きみの目は、きつと…のところが一番いいなと思いました。もっと詩を読みたいなと思いました。

・SYさん：私は、そんなきれいな目とかわいと思いますね。三枚書いてくれてとても感謝です。

ありがとうございます。詩は難しいですね。詩をお家で練習したら難しいのが分かりました。青柳先生はすごいですね。

・MKさん：とても「すき」という思い、気持ちがとてもつたわってきて、とてもいい詩だと思いました。わたしもこのような詩を書きたいです。

・KMくん：目の中にいろんな言葉があったのがすごいです。

以上が、「きみの目」について出された感想のおおよそである。そして、これまでの自然な流れ（「青柳先生」から送られた詩を三つも読んできたから、今度は、「ぼく・わたし達」が書いた詩を、初めて会う「青柳先生」に向けて発表したいという流れ）にしたがって、本来は青柳自身が授業をおこなう予定であった7月13日（水）の授業時間は、逆に、子ども達が青柳に向けて各自が書いた詩を発表する時間にする、ということになった。そして、その時には、担任の岸島自身も、自作の詩を発表することを子ども達に「宣言」した。また、詩の発表会は、教室ではなく、みんなが車座になって全員が発表できるよう、教室よりも広い特別教室「視聴覚室」で行うことになった。

そして、7月13日の5時間目、青柳も参加し、車座になっての詩の発表会がおこなわれた。40名中39名の子ども達が一人一人、自らの詩を読み上げる形で行われた。特別支援学級に通級しているA君はその日は発表はしなかったが、車座の少し外側から皆の発表を真剣に聴いていた。そして、発表会の最後に、A君はみんなの詩について「すごい」と感想を語った。そして、岸島自身も、「宣言」通りこの日のためにつくった自らの詩を発表した。

3. 詩と対話する

3. 1. 「詩集 ひとりぼっち」

7月13日の発表会が終わった後、青柳は発表された子ども達の詩を一時預かり、「詩集」をつくった。そして、出来上がった「詩集」を子ども達一人一人に渡したのは夏休みがはじまる前日の7月20日である。だから、残念ながら、この「詩集」を読んだ子ども達の感想を聴き取ることは岸島にも充分には出来なかった。

因みに、詩集のタイトルは「ひとりぼっち」である。というのも、「ひとりぼっち」とは、このクラ

スの担任である岸島が、発表会の中で発表した自作の詩の題名だからである。即ち、次の詩である。

ひとりぼっち

岸島 崇

ぼくは、ひとりぼっち
家族も、友達もいる
三年三組の子どもたちも、青柳先生もいる
でも、ぼくは、ひとりぼっち

だれといっしょにいても、ぼくはひとり
ひとりでも、ぼくはひとり

でもね、ぼくは、ひとりぼっちのぼくを生きていきたいんだ
ひとりぼっちのぼくをだきしめたいんだ
ひとりぼっちのぼくとして、ひとりぼっちのあなたと話したいんだ
ひとりぼっちのあなたを、ぼくはすきになりたいんだ
ひとりぼっちのぼく
ひとりぼっちのあなた

2016.7.13.

上の岸島の詩「ひとりぼっち」を冒頭に掲げ、それに続く形で全ての子どもたちの詩を載せた「詩集」をつくったわけである。ところで、上の岸島の詩「ひとりぼっち」に、もしかしたら違和感を持つ人がいるかもしれない。小学校三年生の子ども達に向けて、なぜ、敢えて「ひとりぼっち」という詩を書いたのかと。

しかし、この「ひとりぼっち」には、まさに岸島の子ども達に向けたメッセージが織り込まれている。それは敢えて言えば次のように言えるだろう。友達と仲良くすることはとても大事なことだ。でも例えば、自分が「正しい」と思うことに対して、もし友達が「それは間違っている」と言ってきたら、どうしたらよいか。もし、自分自身でも、「自分が間違っていた」と心底思えるなら間違えを素直に認めればいい。しかし、いくら相手に「間違っている」と言われても、それを一度受けとめた上でなお改めて考えて、やはり「自分は正しい」と思うのならそれを主張し続けるべきである。そして、その場合、まさに、「ひとりぼっち」になることを覚悟しなけ

ればならない。でも、それは、片意地をはっているわけではない。そうではなく、相手のためを思ってこそ、「自分は～思う」と主張するのであり、また相手にも、本当はどう考えているのかを主張してほしいのである。

だから、人と人が本当に会うためには、本当に理解し合うためには、「ひとりぼっち」でなければならない。この意味で、三年生は、三年生なりに、「ひとりぼっち」を実践してほしい。そして、岸島は、「教師」としてではなく、一人の対等な人間として、「ひとりぼっち」の人間として、子ども達一人一人と出会いたい、と願っている。詩「ひとりぼっち」には、このようなメッセージが込められている。言い換えれば、「ひとりぼっち」の「ぼく（岸島）」は、「ひとりぼっち」の「あなた（子ども一人一人）」と対話がしたいんだと、そう岸島は詩を通して呼びかけている。

3. 2. 「詩集」の中で対話する

上に引いた岸島の詩「ひとりぼっち」を冒頭に掲げた「詩集・ひとりぼっち」には、子ども達39人の詩と、特別支援学級に通うA君の発表会での口頭での感想が載せられている。そして、一人一人の詩・感想に対して、青柳はコメントを添えた。一人一人の詩を読み、その子の「心の世界」に触れ、何かを語りかけたいと青柳は思ったからである。コメントを読んでくれた子が、果たして、青柳と対話している感覚をもてたかどうかはわからない。しかしとにかく、以下、「詩集 ひとりぼっち」（岸島・青柳、2016）から、何人かの詩（+青柳のコメント）を掲げておきたい。

風をあびて……

Y. T. (女子)

さかをくだって風がヒュー
さかをくだってかみボサツと へんなかみ
へんなかみで、さかくだる。
さかをくだって木のねっこでゴロゴロころん
ちがでたまま
道をはしると風がヒュー
こうえんがあった
ブランコにのって
空をみると
あめがふった

あめがザーザー
水たまりにはまり
それでもはしって
家についたら
雨やんだとたんに
きれいなにじがみえた。
きょうはすてきな一日で
風がヒュー
とてもきもちいい
一日だ

*ぼくたちの回りの世界って、こんなにすばらしかったんですね。Tさんの詩は、そのことをぼくに教えてくれました。それに、回りの世界だけじゃなくて、ぼくたちもすばらしい、ということも。(青柳)

(無題)

W. T. (男子)

ぼくはみんながだいすきだよ。でもおこられたらどうしようとおもうけど、だいじょうぶです。

*T君の言うとおりの、だれかをすきだ、ということは、おこられてもだいじょうぶ、ということですね。そして、「みんな」のことがすきなT君はすごい、とぼくは思いました。(青柳)

ふしぎなかめ

H. Y. (男子)

ぼくは前にふしぎなことがあった。
前、おじいさんが竹切りにいった。
すうじつたった。
ぼくは、おじいさんの車にのっていた。
するとぼくは車のうんでんせきにかめをみつけた。
おじいさんにどうしたのといった。
でもおじいさんはしらないよといった。
おじいさんにまえどこにいったのときいた。
すると竹を切りにいったといった。
ぼくはそのときにたけをきりにいったときに車にのったと思った。
でもぼくはかめがじぶんで車に入ったならすごいと思った。

*詩を読んで、かめは、Y君に会いに来たのではな
いか、と思いました。そして、かめのことを思うY

君のやさしさが伝わってきました。本当は、いろいろなもの、人間に会いに来ているのに、気づかずにいるのかなあと、Y君の詩を読んで感じました。(青柳)

すきってなに？

M. I. (男子)

すきってなんだろう。
みんなってなんだろう、
すきってなにをつたえているんだろう
そうぞうしたらどうだろう

*本当に、「すきっ」て、なんなんでしょう？「みんな」ってなんなんでしょう？そして、「すきっ」ていう気もちは「なにをつたえて」いるんでしょう？I君の問いかけに、ぼくは本当に感動しました。その「こたえ」を見つけないと思いました。ありがとう、I君。(青柳)

鳥と空をとびたい

S. A. (女子)

わたしに まほうがつかえたら
わたしは鳥と友だちになりたい
せなかにのって、鳥と一緒に空をとびたい。
そしたらきつと気もちがいいだろう。
でもさいしょは、こわくて泣きそうになるかもしれない。
それでもわたしは鳥といっしょに空をとびたい。

*「こわくて泣きそうになるかもしれない。それでも…いっしょに空をとびたい」というAさん。すばらしいと思いました。Aさんのおかげで、ぼくもがんばろうと思いました。(青柳)

夕方毎日遊ぶわたし

H. R. (女子)

わたしは外で遊ぶのが大好きだ。
友だちは、いつもさそってくれる。
わたしは、おにごっこ、走るのが好き。
たまに遊んでいるとケンカしてしまう。
友だちと自分を考えてみるとごめんねといったほうがいいかなと思う。
でも、いつまでたってもあやまれない。
いつまでもあやまれないわたし。

あやまりたい気持ちはある。
でも、こわくなってしまう。
あしたあやまろうと思う。
そしてあやまろうとしたとたん心がドキドキしてきた。
でも、ゆうきを出して、あやまった。
そうするとゆるしてくれた。

*ゆうきを出してあやまったRさん、本当にすてきだなあと思いました。「ゆうきを出してあやまること」、人にとってこれほど大切なことはありませんね。(青柳)

食べ物

T. R. (男子)

食べ物はいろいろしゅるいがある。
野さい
くだ物
肉
おかし
その中でおいしいのはいろいろある
きらいなものもある
でも全部おいしく作られてる。

*R君の詩を読んで、あらためて、たくさんの食べ物があることに気づきました。そして、その食べ物は、人の心がこめられて、たいせつに作られていることにも気づきました。「きらいなもの」でも、「全部おいしく作られている」ということは、感動です。(青柳)

ふうりん

O. Y. (女子)

ふうりんが
風にゆれて
リンリン
歌にあわせて
おどっているみたいだ。
ふうりんの音をきくと、
夏をかんじる。
ふうりんの音を聞くと、
あついののに、すずしくかんじる。
どうして、ふうりんは、あつさを
すずしくさせることができるのだろう。

*どうして、ふうりんは、すずしくさせてくれるのか、本当にふしぎですね。自分の回りの世界に耳をすましているYさんが、本当にすてきだと思いました。(青柳)

家族のこと

N. S. (男子)

ぼくは4人ぐらしです。
ぼくはいつもかぞくのそばにいる
かぞくがいない人はいない
ぎゃくに家族がいないと
その人は、うまれない。
ぼく家族がいるからいきてる
みんなだってそうだ
もし家族がぼくのこと
きらいになったらぼくは、
くやしくなるだろう。

*「ぎゃくに家族がいないとその人は、うまれない。」
「ぼく家族がいるからいきてる」というS君の詩のことばに、本当に感動しました。S君の詩の一つ一つのことばには重みがあります。三組のみなさん、ぜひ、それをあじわってください。(青柳)

4. おわりにかえて:「詩で対話する／詩と対話する」 ことの意味(意義)

以上、私たちがおこなった実践を紹介してきたが、ここで改めて、まず「詩で対話する」ということに、なぜ私たちがこだわったのかについて、実践を振り返りながら述べてみたい。

「2. 2.」で見たように、実践がはじまった当初、少なくない人数の子ども達が、詩「すき!!」の最終行の「なぜなら、そうかんたんにはゆるしてくれないきみのことが、ぼくはやっぱり、本当にすきだから」の「意味」が分からないと言っていた。例えば、Nくんは、率直に「ゆるしてくれないきみのことがすきということが分からない」と。しかし、作者である青柳自身には、まさにこの詩のこの最終行には思い入れがあった。「そうかんたんにゆるしてくれないきみのことが……本当にすきだから」という表現によって、いわば、一人の人格がもう一人の人格に出会う瞬間を表現したつもりでいた。子ども達には、「そうかんたんにゆるしてくれない」一人の人間の人格を感じ取ること、同時にそのような人

格に向き合う人格、ということを感じてほしかった。そして、子ども達自身の中にも、同様の人格（感情の奥底〔魂〕）があることを感じてほしかった。しかし、このことを感じ取ることが難しかった子が少なからずいたわけである。

しかし、青柳は、それなら感じ取れないことを感じ取らせるような授業をしよう、とは全く思わなかった。一般に、ある文章の意味が感じ取れない（分からない）理由は、とりあえず、二つに大別できるだろう。一つは、文章全体の中で（即ち文脈の中で）一つの文の意味を感じ取ることが出来ない場合。もう一つは、文章が語っている（表現している）「経験」そのものに近い経験をしたことがまだない場合である。例えば、恋をした経験がない者が、恋について書いた文章を読んでも感じ取れるものは少ないだろう。しかしまた、経験していないことは感じ取ることが出来ない、と言い切ることは出来ない。文章全体（文脈）から、自分にはあまり身近でなかった経験の意味を想像する可能性は残されていると言えよう。しかし、いずれにしても、青柳は、繰り返しになるが、感じ取れなかったことを感じ取らせるような実践（授業）をしたいとは考えなかった。

ところで、青柳は以前、中学生と高校生を対象に、「詩」に関わるアンケート調査をしたことがある。アンケート設問の1、2番目は次の通りである。「1. あなたは詩が好きですか?」、「2. あなたは（詩の本に限らず）本を読むことが好きですか?」。そして、中、高校生いずれも、「1.」に対して「詩が好き」だと答えた人数は、「2.」に対して「（詩の本に限らず）本を読むことが好き」と答えた人数よりも少なかった。つまり、本を読むことは好きでも、詩は好きではない生徒が少なからずいたのである。（詳細については、（青柳, 2012a: p.67.）を参照いただければ幸いである。）

本を読むことは好きでも、詩は好きではない、という原因は、推測するに、詩を読む際には、書かれていない文脈を想像する（補う）ことが、一般の散文を読む時以上に必要になるからだと思われる。例えば、小説（散文）は状況を詳細に語ってくれる。それに比べれば、詩は、小説程には状況を語ってくれず、意味を感じ取ることが難しいと感じてしまう。

しかし、だからといって、「詩」を扱う授業の中で、生徒が想像できない文脈を意識させて、一定の意味を感じ取らせようとすると、生徒は「詩」を好きで

なくなってしまうこともあると思われる。それは、生徒自身の「感情の奥底」とは無関係に、一方的に、「～のように感じなさい」ということが強制されるからであろう。そして、生徒は、ますます「詩」は「分からない」と感じ、「詩」が好きでなくなっていく。これは、とても残念なことだ。それは結果的に、「詩」に出会えないことで、「感情の奥底（魂）」を表現する一つの可能性を奪われているからである。

それゆえ、今回の小学校三年生を対象とした実践でも、青柳は、感じ取れなかったことを（強制的に）感じ取らせるような実践（授業）をしたいとは考えなかったのである。そして、その代わりに選んだのが、「分からない」という子どもの応答に対して、「詩で対話し続ける」という方法である。やや大げさに言えば、「あなた」の「感情の奥底」が「分からない」と言う「他者」に対して、繰り返し「詩」を通して、「わたし」の「感情の奥底」を表現し続けるということ。この「詩で対話する」という方法によってこそ、子ども達は真に他者の「詩（感情の奥底）」を感じ、自らも「詩（感情の奥底）」を書きたいと思うことができるのではないか、そう考えたのである。

上の思いを背景に、私たちは、授業のほとんど（約2週間）を「詩で（子ども達と）対話」し、さらに子ども達自らが「詩」を書く実践を展開したと言えるだろう。子ども達の側からすれば、かなりの時間、「（青柳の）詩と対話する」ことを実践し続けたと言えるだろう。

しかし逆に、正直に言えば、青柳自身が、（最終的に）子ども達の書いた「詩」と「対話する」ことがうまく出来たかどうかは自信がない。上にみたように、具体的に青柳がおこなったのは、「詩集」の中で子ども達の詩に「コメント」をする、という形で、「（子ども達一人一人が書いた）詩と対話する」ということである。しかし果たして、「コメント」を通して、「子どもの詩と対話する」ということが真に成り立っていたかは自信がない。むしろ、実感として「対話」が生まれていると青柳自身が感じていたのは、当の一人一人の子どもの「詩」を読んでいる「最中」である。しかし、子どもの詩を読んでいる時に、自分の感情の奥底（魂）で生まれてきたものを「コメント」という形で表現できたとは思えない。

極論すれば、「詩と対話する」ならば、「コメント」はいらないのかもしれない。敢えて言えば、「詩」

に対しては、「詩」で応答するしかないのではないだろうか。その意味で、もう一人の授業者である岸島が選んだのが、この「詩に対して詩で応答する」という方法であったと言えるだろう。「ひとりぼっち」という詩を書き、自らも車座の中で対等の形で詩を発表することを通して、岸島は「子どもの詩と対話する」実践を拓いたと言えるのではないか。このように「詩で詩と対話する」という方法は、子ども達が真に詩を身近に感じ、魂の表現者として育てていくことを支えることが出来ると思うのだがどうだろうか²。

注

1 特に小、中、高校でおこった実践の詳細、またその実践の省察については、是非、(青柳, 2006a,b; 青柳, 2007a,b; 青柳, 2008a,b; 青柳, 2012a,b) を参照いただければと思う。

2 学校教育(また、その他あらゆる場)において、「詩」を読み書く実践をおこなう際、哲学者のマルティン・ハイデガーの言語論、いわば「言葉」はそもそも「詩」である」という思想から学ぶことはおおいと思われる。このハイデガーの思想については(ハイデガー, 訳, 1996)を参照。また、(青柳, 2017)は、このハイデガーの言語論の意味(意義)を、「子どもの詩」から解きほぐすことをこころみた。本稿の姉妹論考として、是非、参照いただければと思う。

参考文献

青柳宏(2006a)．きのぼう：詩を書く実践の展開について．(『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第29号)

青柳宏(2006b)．空に一つ：詩を書く実践の意義について．(『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第29号)

青柳宏(2007a)．「模倣」としての詩：詩を書く実践についての省察(その一)．(『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第30号)

青柳宏(2007b)．「経験の見つめ直し」としての詩：詩を書く実践についての省察(その二)．(『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第30号)

青柳宏(2008a)．詩を読む実践について：「矢沢宰詩集」の授業(その一)．(『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第31号)

青柳宏(2008b)．詩を読む実践について：続・「矢沢宰詩集」の授業(その二)．(『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第31号)

青柳宏(2012a)．あなたはだれ：思春期における詩の授業の研究(その一)．(『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第35号)

青柳宏(2012b)．わたしはだれ：思春期における詩の授業の研究(その二)．(『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第35号)

青柳宏(2017)．ことばを育むために(その二)：M.ハイデガーの言語論の視界から．(『宇都宮大学教育学部研究紀要』第67号 第1部)

ハイデガー, M.(1996)．言葉への途上(ハイデッガー全集 第12巻)．創文社〔原著初版は1985年〕

茨木のり子(1979)．詩のこころを読む．岩波書店

岸島崇・青柳宏(2016)．鹿沼市立・東小学校三年三組・岸島崇 学級・詩集 ひとりぼっち．私家版
プルースト, M.(2013)．〔高遠弘美・訳〕失われた時を求めて③第二編「花咲く乙女たちのかげにⅠ」．光文社古典新訳文庫〔原著初版は1919年〕

平成29年3月21日 受理